

大塚山に築かれた古墳・塚

大塚山は、不動川ふどうがわの北側に位置する比高差約30mの南北に細長い丘陵で、頂上に会津大塚山古墳、その周辺に、円墳や横穴墓、中世の経塚が築かれています。

円墳は、大塚山古墳が築かれた後の時期に大塚山古墳の前方部上、及び西側から北側に9基築かれ、木炭で覆われた棺の跡や、石棺が出土したこともあります。

横穴墓は、大塚山の南側斜面に12基が、古墳時代の終わりに造られました。

また、中世には、後円部上に経塚が築かれ、昭和39年の調査では、陶器の四耳壺が出土しました。

古墳の形状と規模

古墳の形は「前方後円墳」という円形と長方形を組み合わせた形で、丘陵を部分的に削ったり、削った土を積んだりして形を整えています。

後円部、前方部ともに2段から3段に構築されており、全長114mを測る東北地方屈指の大型古墳です。

また、後円部と前方部が接する東側の部位が張り出した独特な形状となっています。

埋葬施設(埋葬された跡)

後円部中央の約1.5~1.8m程の深さに、埋葬された跡が北と南に2つ並んで発見されました。

棺を納めるために掘り込まれた墓穴の規模は、南棺側が長さ約12m、幅約4m、北棺側が長さ約10m、幅約3.5mで、黒土化した棺の痕跡のみが確認されました。南棺は長さ9.3m、幅1.1m、北棺は長さ7m、幅1mと推定されます。

棺は、丸太を縦に半分にし、中をくり抜いて作られた「割竹形木棺わりたけがたもっかん」です。両端を粘土で押さえています。

2つの棺は同時に埋められたのではなく、南棺が先に、その後北棺が埋められたことが土層の観察からわかりました。



1989『会津大塚山古墳測量調査報告書』より



(西から撮影)

- 頭の上方に矢を入れた鞆
 - 遺体の頭部脇に鏡と大刀
 - 足下に鏡と装身具
 - 鉄剣と装身具
- 出土品に赤色顔料が付着していたことから棺内全体が赤彩されていたと推測されます。



南棺埋葬状況イメージ図